

# 九州大学総合研究 博物館ニュース

October 2005 No.5

## 大学博物館の教育支援の役割

九州大学総合研究博物館 館長 村江 達士

科学技術創造立国を目指すわが国においては、優れた研究者を多数育成することが急務です。そのためには、子供が予備知識なしで発する無条件の興味や疑問を知的好奇心につなぎ、成長とともに知識欲や学問的好奇心へ発展させ、さらに、創造的活動ができる領域まで高める必要があります。最近の公共の博物館や科学館は、貴重な学術遺産や最新の科学技術を一般社会人向けに広く紹介することを任務とする傍ら、子供の興味を知的好奇心に向けて育むために様々な努力をしています。そこでの来館者の大部分は、予備知識の豊富な大人と、ほとんど予備知識の無い子供です。予備知識の無い子供に興味を持たせることは、研究者を育てるための第一歩とみなせません。

現在では、小学生が、中学、高校へと進学してゆく過程で理科に関心を持つ生徒の割合が、7割→5割→3割と減少します。大学へ進学してくる学生にもこの傾向は反映されているはずです。現在の大学の低年次教育では、中学レベルの予備知識を前提として授業をしなければならない場合が多くあります。中学レベルから大学の教養レベルまで、一挙に知識や理解度を持ち上げるには、大変な労力を必要とします。大学博物館の機能をうまく生かすと、この労力を軽減し、かつ知識の増大や理解度の到達レベルを高めることが可能となります。なぜならば、大学博物館は、過去における先端的研究が現在の最先端の研究へとつながってゆく過程を、研究に使われた標本や資料そのものを使って説明できるからです。九大博物館の場合、その機能が学部教育の支援に一

部使われていますが、大学の教養教育にフルに稼働させるには、現在進行中の全学の標本や資料の一元管理体制の確立が不可欠となります。また全学教育のカリキュラム編成とも密接に関連してくることになりますが、博物館施設の充実がなると初めて具体的検討課題になってくると思われます。

大学博物館は、その機能を拡充することで、様々な形で社会貢献をすることが可能です。特に、中学生から大学生までの知的好奇心を継続的に発展させてゆく過程を支援する施設として重要な役割を果たせると考えられます。そのためには、見た目に美しく、理解しやすい配置で、感性に訴えるディスプレイが重要な要素となります。それに合わせて資料や標本について、中学生には中学生、高校生には高校生なり（もちろん大学生には大学生なり）の予備知識のレベルに対応した解説が必要になります。現在、高大連携が盛んにうたわれ、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）が実施され、その事業の中に博物館や科学館の積極的利用も組み込まれています。しかし、中学教育の底上げは、今後の課題として残されています。大学博物館は、大学の持てる膨大な数の資料や標本を駆使し、多数の優れた研究者の指導能力の助けを借りて、中学生から大学生にいたる期間の学習の一貫した支援に積極的に関与し、日本の教育レベルの向上と、結果的には、自校への入学者の質の向上に貢献する役割を果たすべきであると考えます。そのためには、大学内外の関係者との密接な協力が不可欠です。今後ともよろしくご協力お願いいたします。

